KCELS Newsletter No.4
APRIL 1989

ＫＣＥＬＳ第13回大会

泥　谷　征　人

特別講演の講師として東京女子大学の佐藤宏子教授をお迎えした今回のＫＣＥＬＳ大会は、これまでの大会に優るとも劣らない実りの多い集会であった。この大会のために色々と準備をして下さった委員の先生方にお礼を申しあげたい。

年に一度の細やかな集まりではあるが、特別講師による刺激に富んだ密度の濃い講演や、卒業生のレベルの高い研究発表の蓄積から、この13年という短いながらも充実した年月のなかで、ＫＣＥＬＳの伝統らしきものが確立され始めたように思われる。学会に関係する方々の御協力と御支援のたまものである。この見え始めてきたものに、いかにして明確な形を与えるかは、これからの学会のあり方とあわせて、会員一人ひとりが共に考えてゆかなくてはならない課題である。

ＫＣＥＬＳが益々充実・発展し、会員相互の活発な知的交流を可能にする場として定着してゆくように願っている。

■特別講演（要旨）■

19世紀の女性作家を読む
ーストウ夫人とオルコットを中心にー

佐　藤　宏　子

大衆作家のポピュラーな作品を取り上げる理由は何か、それは、とくにアメリカで今まで文学の主要作品とされていたものの正統性が疑われはじめた現状と関連があります。この事態の背景には、黒人、女性、少数民族の人達がそれぞれ文学的遺産の重要性を主張し、白人男性によって選択され解説されてきた作品を認めないという傾向が見られます。また、研究者も、マルキシズム、フェミニズム、構造主義、脱構築などの批判理論の洗礼を通って、自分の文学への姿勢を形成してきた若い人達が中心になってきました。このようなアメリカ社会の多様化、構成グループの力関係が文学の主要作品の選択を左右するようになったと言えますが、問題はそれだけではない

と思います。つまり、文学作品に対する見方として、作家が生き、作品が生み出された時代と社会を見る視点が加わったのです。最近、アメリカ文学研究において、大衆小説家が注目されているのはそのためと考えられます。私が今日取り上げる作家たちも、その範疇に入る人達です。19世紀という時代の特徴は、*The Bostonians* 執筆まえのジェイムズの *Notebooks* の言葉にも見られるように、女性たちが女性同志の団結によって力を得て、自分たちの権利を主張し始めたことだと言えます。エリザベス・ケネディ・スタントンは、セネカ・フォールズでの第一回の女権集会での演説の冒頭で、女性の苦難は女性にしか理解出来ないこと、それを世間に伝えることも女性自身がしなくてはならないことを指摘しました。女性は心（感性）に、男性は頭（理性）に支配されていると考えられていた時代において、女性の心が理解出来るのは同じ女性であるという考えから、スタントンとスーザン・Ｂ・アンソニーの間に見られたような、女性間の友愛関係が結ばれるようになります。また、19世紀には、女性が社会に出て働くことを始めた時期でもありました。そこから生じた諸問題も女性同志の団結を促しました。

ストウ夫人の『牧師の求婚』は、主人公メアリ・スカダーの結婚に至るまでの曲折を扱ったもので、感傷小説の代表と見なされてきました。しかし、この小説をメアリが人々に語りかける声をもつに至る過程を描いた作品として考えるとき、この小説が時代と深く関わっていることが明らかになってきます。小説の冒頭では、メアリは「生きた福音」と恋人ジェイムズ・マーヴィンに呼ばれながら、自らの言葉で彼を神の道へ導くことは出来ません。この時点では彼女の精神的指導者は、エドワーズ

の後継者と考えられている牧師、サミュエル・ホプキンズです。小説の進行につれて、旧約聖書的な怒りの神の神学を説き、完全な自己抹殺を求めるホプキンズの教えは、悩める人たちに安らぎを与えることが出来ません。それに対し、メアリは、ジェイムズが難破したという悲しい知らせを受け、彼の魂の救済についての苦悩を経て、キリストの仲介による神の信仰に到達します。彼女が教会の祈禱集会で涸れることのない神の愛について語ったとき、人々は感動の涙を流します。魂の導き手としての立場が、メアリと牧師の間で逆転したことになります。ストウ夫人は女性の社会的、政治的権利の主張をしているのではありませんが、声を用いて女性の真情を語る主人公の創造は、19世紀の女性の生き方の認識なくしてはあり得なかったのではないでしょうか。

オルコットの『勤労』は、前半が、「女中」、「女優」、「家庭教師」、「話相手」、「お針子」の五章から成り立っています。当時の一般の女性に開かれていた五つの職業を主人公クリスティ・デヴォンが経験することによって、それぞれの職業が持つ問題点が示されていきますが、最大の問題は、働く女性の孤立です。前半ではクリスティが結婚、夫の南北戦争での戦死、出産を経て、働く女性の団結のために、彼女たちの苦難を声を通して語る代弁者として生涯をおくる決意をするところで、小説は終わっています。かって、女性の幸福をもたらすと考えられてきた妻、母、という役割が二次的に扱われ、「愛情深い女の連盟」が女性に明るい未来をもたらすものと考えられています。ここでも、声を用いて女性が直面している問題を語ること、女性の連帯が中心に扱われています。

このように考えてみますと、19世紀の女性作家を読むことが、時代を読むことになるということがお解りいただけたのではないかと思います。当時の人々の心を知ろうとするとき、大衆作家の作品の持っている価値には無視出来ないものがあると考えています。

■研究発表(要旨)■

Isaac Bashevis Singer と ユダヤ神秘主義・カバラについて
― *Satan in Goray* を例に―

三 杉 圭 子

Isaac Bashevis Singer は今日最も世界的な名声を得たYiddish 語作家だが、しばしば強欲で好色、また悪魔や死霊を恐れる迷信深いユダヤ人を登場させることから、彼をユダヤ人のスポークスマンとしてとらえるユダヤ人読者の間からは、その道義的立場を疑問視する声も多い。しかし、ユダヤ教の伝統的神秘主義であるカバラの思想と照らし合わせてみると、Singer の宗教観、道徳観は正統派ではないにしても、深くユダヤの伝統に根ざしていることは明らかである。

Singer は悪の存在理由、性の霊的価値の肯定をカバラの書に見い出し、創作上の道徳的基軸としている。悪は創造の為、神が自らを収縮させたがゆえ現世に内在しており、人は悪を克服することで道徳的強さを示さねばならない。Sex は神とその実在の結合の象徴であり、さらに人間の神への愛を反映するものである。また Singer は悪魔や死霊を道徳的葛藤を表現する道具として用いている。

Satan in Goray はカバラに基づく道徳観にそって構築された作品である。ここでは偽のメサイア Sabbatai Zevi 運動を取り上げ、Goray の町における宗教的狂乱と堕落を描いている。Sabbatai 一派であるItche Mates と Reb Gedaliya による町の娘 Rechele の破滅に Goray の町全体の荒廃と崩壊を反映させて、性的タブーをはじめとする道徳律が破られ、悪魔の支配に墜ちる様を表わしている。

Satan in Goray は誤り、または禁じられたものを表現することで正義を暗示するという逆説的な Singer の創作のテクニックを明示する作品である。

新聞英語の比較研究
(文体論的アプローチ)

中 尾 有 香

「The Times の英語は格調高い」とか、「The Japan Times よりも The Daily Mainichi の方が読み易い」とか言った事をよく耳にします。これまで直感的、主観的にとらえ、「文章の格調が高い」とか、「読み易い」「スピードが速い」などといった抽象的な言葉で表わされてきた文体の特徴を、客観的に分析し、具体的な数字で表わしてみようとする試みが近年多く行われています。今回は、数ある英語の variety の中から、新聞英語に限定し、海外で発行されているもの3社(The Times, The New York Times, USA Today)、国内3社(The Japan Times, The Daily Yomiuri, The Mainichi Daily News)を選び、各社の文体的特徴がよく分かる様に28の分析カテゴリーを設け、分析結果を比較検討してみました。その結果、今後更に多くの分析が必要であると思われますが、事前にアンケートをとった際のネイティブ・スピーカーの

「The Times より The New York Times の方が読み易く、又、国内で発行されているものの中では The Japan Times が一番読みにくい」という感想を、具体的な数字で表わすことができました。

キャンパスニュース

◎神戸女学院大学 大学院研究科 英文学専攻博士課程、増設認可される

24年前、関西の女子大学としては初めて大学院を設置し修士課程を発足させた本学に、1989年4月より英文学専攻博士課程を増設することが認可されました。

そこで、大学院研究科英文学専攻の代表（1988年度）でいらっしゃる金城教授に博士課程増設認可に際し、以下のご報告をいただきました。

キリスト教精神を基盤とする神戸女学院は、1875年の創立以来、英語教育を重視して女子教育の先駆的役割を果たしてきた。ちょうど、70年前の1919年、西日本最初の女子大学として認可を受けたとき、大学部本科は英文科であった。戦後、新制大学となってからも、米国のリベラル・アーツ大学を範にしてアンダーグラデュエイトの教育に力点をおいてきたが、1965年、ようやく大学院文学研究科が設置され、社会学専攻とともに英文学専攻修士課程が発足した。爾来、51名の修了者を世に送ったが、41名（専任は22名）が大学に職を得て教育研究に従事している。また、近年は、博士課程への進学希望者も著しく増加している。1980年代には、修士課程修了者の半数が外国も含めてレベルの高い他の大学院へ進んでいるが、研究課題の一貫性の観点からも本学において研究が続行できるよう博士課程の増設を訴える声は大きくなるばかりであった。大学教員として採用されるには博士課程を修了することが条件になりつつある今日、研究者として十分に活躍できる資質をもつ進学希望者にとって、博士課程の増設は本学院をより一層魅力あるものにすることは明白である。その上、大学院の充実発展が学部における教育研究の活性化を促進することも大いに期待できる。

教育研究上の特色

総合的な見地に立ちながら個々の専門分野を究めることを主旨として一定の成果を得てきた修士課程の特色を博士課程においても生かしたい。細分化された「専門」を超えた幅広い分野の研究が、特定の研究テーマを深く究明し、一人前の研究者としての能力の証となる博士論文に結実する研究活動と不可分に重要であることを強調する。次に示すとおり、ルネサンスから現代に至る英米文学、及び英語学を内容とするカリキュラム編成をもって発足するのであるが、将来は中世の文学も含めて授業科目のよりいっそうの多様化を図りたい。英文学専攻においては、細く屹立するオベリスク型よりは底辺部の広いピラミッド型の研究者が究極的にはより高いレベルに達し、教育者としてもおそらくはより望まれるであろう、と考えるからである。

また、大学院における英文学専攻者のほとんどが大学に職を求める現状において、英文学研究者の養成がすなわち英語教員養成でもある事実にも十分に留意し、明治以来のいわゆる「生きた英語」を尊重する本学の伝統も発展させたい。

このことは、わが国の国際化が急速に進むにしたがって、高等教育の場においていっそう強く要求される「生きた英語」の運用能力に秀でた研究者の養成にささやかながらも貢献することになると自負するものである。

授業科目の内容

英文学特殊研究Ⅰ	シェイクスピア（金城盛紀教授）
英文学特殊研究Ⅱ	十八世紀を中心とする風刺文学（高瀬ふみ子教授）
英文学特殊研究Ⅲ	二十世紀イギリス文学（A. Banerjee 教授）
米文学特殊研究Ⅰ	アメリカ小説（別府恵子教授）
米文学特殊研究Ⅱ	アメリカ詩（三宅晶子教授）
米文学特殊研究Ⅲ	アメリカの散文（C. Broderick教授）
英語学特殊研究Ⅰ	英語の史的研究（伊藤栄子教授）
英語学演習 Ⅱ	文体論（豊田昌倫講師）

◎英文学科新任教員紹介（ＡＢＣ順）

- **Michelle B. Heeter 専任講師**（ミシガン州立大学卒）1989年4月から2年間、一回生の英語教育に専念される。3月23日に来日。
- **渡部充（わたなべみつる）助手研究助手**（大阪大学大学院文学研究科博士課程修了）1989年度は主に英文科一回生の購読、作文などご担当になります。

会員消息

- **高瀬ふみ子氏**（本学教授　前女性学インスティテュート・ディレクター）昨年インドネシアのサラティガで開催（6月28～7月4日）されたＡＷＩ会議に出席、"Denial of Basic Fundamental Rights for Women" の題で報告された。

- **C. V. Broderick氏**（本学教授）ミシガン州立大学における一年の研究期間を終え、帰国。
- **溝口薫氏**　本学よりカリフォルニア大学（バークレー校）に1989年９月から一年間留学。
- **林なおみ氏**　園田女子短期大学専任講師（1989年４月より）
- **難波江仁美氏**　フルブライト留学試験に合格。親和女子大学より休職許可を得て1989年９月から一年間米国留学。
- **西條智子氏**　大阪学院短期大学より、1989年４月から一年間米国留学。
- **弓削佐知子**　昨年双子男児をご出産。産休後、再び英語教師として職場に復帰される予定。

会員による出版紹介

- **馬場美奈子氏**
  『アメリカ文学と時代変貌』（浜野成生編）
  1989年３月、研究社出版
- **別府恵子・林和仁氏**
  『アメリカ文学史』（別府恵子・渡辺和子編著）
  1989年３月、ミネルヴァ書房。
- **別府恵子・原田園子・太田洋子氏**
  『文学と社会における女性と言語』（別府恵子編訳）
  1989年３月、弓書房。邦訳書

会　　則

（1）名　称

本学会を神戸女学院大学英文学会と称する。

（2）目　的

本学会は本学英文学科および大学院英文学専攻卒業生の学術研究の継続と発展を奨励し、それら研究活動の発表と交流をはかり、あわせて在学生の向学研究意欲を推進することを目的とする。

（3）構　成

本学英文学科および大学院英文学専攻卒業生有志および本学英文学科教員を正会員とする。在学生を準会員とする。

（4）会　費

正会員は年会費を納入する。

（5）活　動

年一回、英文学会を開催する。

Newsletter を発行し、会員の活動、英文学科の現況、本学英文学会その他の活動の内容を報告する。

その他。

KCELS Newsletter 編集委員

（第13回 KCELS 準備委員）
- 馬場美奈子　・別府　恵子　・泥谷　征人
- 本城　智子　・C. Seton（ＡＢＣ順）

写真撮影　林　　和仁

KCELS Newsletter No. 4
編集発行　神戸女学院大学英文学会
〒662 西宮市岡田山４―１
Tel（0798）52-0955
振替口座番号　神戸　0-9323